

ハワイ日系人のバイリンガリズム⁽¹⁾

小林 素文

1. ハワイには、いわゆる「ピジン」と呼ばれる独特のことばがある。これは、ハワイが多民族・多言語社会であったために生まれてきたものである。しかし、一般に「ピジン」と総称される中には、いくつかの性格の異なるものが含まれている。「ピジン」とされる例をあげてみよう。⁽²⁾

(1) Luna aikane nara better yo.

(Luna : 監督官, aikane : 友達)

「監督官が友達ならよかったのに。」

No money nara no can yo.

「お金がなければだめですよ。」

(2) I go school time, I work one year.

「学校にいていたときには一年中働いていた」

My husband house kaukau no good. (kaukau : 食事)

「私の夫の実家の食事はまずかった」

(3) I no go stay eat.

「私は食事をしてはいないでしょう」

I stay get bounced out already.

「もう放り出されてしまっている」

(4) He is da kine about her.

「あいつはあの子に首ったけさ。」

We goin' have one party.

「私達、パーティーをやるのよ。」

ハワイに始めて英語があらわれたのは、1778年、イギリス人、キャプテンクックがハワイ諸島を発見した時である。その後、地理上の有利さもあってアメリカ合衆国の影響が強くなり、1894年には原住民の王朝は滅び、1900年より正式にアメリカ合衆国の属領となった。王朝が存続していた時代でも、糖業の盛んになってくる19世紀半ば頃には実質的にアメリカ合衆国の権勢下であり、公用語は英語という状況であった。1820年、ボストンからの宣教団がハワイに来て、熱心な宣教活動をしていく中で、ハワイ原住民は徐々に英語を獲得していった。もしハワイがその後も英語を母語とするものと原住民だけであったとしたら、ハワイの言語状況は異なったものになっていたであろう。⁽³⁾ しかし19世紀半ば、糖業が盛んになるにつれ、多数の労働力が要求されるようになってきた。ハワイ原住民は病気に対して免疫性がなかったため、キャプテンクックの発見の頃30万人いたとされる人口が19世紀中頃には4分の1にも減少していた。そのため、大規模農場に必要な労働力は移民によってまかなわれていった。それは、中国人、南欧人、日本人、朝鮮人、フィリピン人などであった。⁽⁴⁾ これらの労働者は、全て、自国での経済的苦しさから新転地を求めてくる者ばかりであり、英語を事前に学んでから来る余裕のある者はいるはずもなかった。農場では、ルナ(監督官)の厳しい命令に従っていかなくてはならなかった。ルナからの指令は全て英語で行なわれたが、勿論それはきちっとした形式を持ったものではなく、必要不可欠なことがらを伝達するための極度に単純化された、いわゆる電報文の形態であった。一方命令を受ける側

も、自分達の母語が通じない者と伝達活動をはからなければならぬ時には、その単純化された英語を彼らなりに咀嚼して、いい変えれば、自国語の構造の中で組み立て直して用いるようになった。その例が (1) に示したものであり、これをプレピジンと呼ぶ。⁽⁵⁾ こうした自国語の構造から異言語をとらえたプレピジンは、本質的には、チャイニーズピジンイングリッシュのような交易語と同じであるといえる。

プレピジンは、日本人のみならず他人種の間でもそれぞれ発達していったが、異人種間での伝達活動がさかんになっていくにつれ、それは、それぞれの人種の自国語の枠から離れた、リングフランカ（共通語）の役目をするものとなっていた。その例が (2) で示されたピジン英語である。これは自国語の構造を離れ、英語に近づいてはいるが、限られた場面で必要不可欠な伝達活動をしていくときに用いられたので、非常に曖昧性の多い文となっている〔(2) で示した例は、共に、時制の区別が形式として表われていない。〕

大人の新しい言語への対応と子供のそれとは異なる。上記のような、プレピジン、ピジン英語を話す大人達の中に生まれた二世は、大人達の母語である日本語は別にして、一方ではプレピジン、ピジン英語を聞き、学校では標準英語を学ぶという環境におかれる。こうした二重の環境の中で発達させていった言語形式の例が (3) である。これはピジン英語とは異なり、彼ら同士の伝達活動はあらゆる場面において、ほとんどこれで行なわれる、彼らの第一言語の地位をしめていたのである。しかしながら、文の構造は英語とは異なる独自のものを多く含んでいた。〔(3) で示した例では、未来時制が go, 継続相が stay で表わされている。〕この段階のことばを、クリオールとするか英語の方言とするかは議論の分れる所であるが、⁽⁶⁾ 独自の形式を持つこと、ピジンをもととして生じたこと、この二つからクリオール英語と呼ぶ。

アメリカの属領となった1900年には、標準英語を話す白人（ハオレ）の

人口構成はわずか6%未満であり、戦前においてハオレの数は余り増えることはなかった。しかし、戦後はアメリカ本土からの流入もあり、現在では白人が40%以上の人口構成をしめるようになってきた。

主に戦後学校教育を受けるようになった3世は、家庭を含む地域社会では両親の第一言語であるクリオール英語に接していき、学校をはじめとする公の場では標準英語に接する環境にあった。こうした中で、彼らは、クリオール英語をさらに標準英語に近づけた形式を発達させていった。その例が(4)である。そこでは、クリオール英語の特徴であった、英語にはない文法形式がなくなっている。こうなると、これはもはやクリオールとはいいがたく、英語の範囲の中でとらえられる下位方言となる。それは、(4)で示されているように、語彙 (*da kine*)、冠詞 (*one party*) 等においては標準語とは異なるが、基本的文法構造は英語の枠の中におさまっているからである。この下位方言は現在では、標準英語を話す層の中でも、コーヒーでも飲みながら、うちとけた気分の中では用いられるようになってきた。(coffee break talk⁽⁷⁾)

ハワイのいわゆる「ピジン」には、上記のように、時代とともに異った性格をもつものがあらわれてきた。そして、時代によってはそのいくつかが並存してきたわけである。

2. ハワイの中で有識者の意見の代表とみなされる、ハワイの英字新聞、ホノルルスターブリテンの社説の中で、「ピジン」をどのようにとらえてきたか、戦後から1980年にいたるまでの流れをみてみよう。

「アメリカ英語を話そう (Speak America) が、学校が受け入れるべきスローガンである。」(4/16/'49)

「小学校・中学において (ピジンを矯正するための) スピーチプログラムをもっと強化すべきである。」(7/16/'54)

「ピジン英語を話すものは経済的、社会的、文化的成長の妨げとな

る。」(4/3/'58)

「さらに重大な問題はピジンを用いて思考がなされると、浅慮なものになってしまうことだ。」(12/10/'58)

「ピジンは学習の妨げとなるものであるから、そんなことばを踏みつぶしてしまう (stamp it out) ことになんの異論があろうか。」
(12/3/'61)

このように、1960年代初期までは、「ピジン英語」に対しては否定的、攻撃的なものばかりであった。しかし1964年の社説では、今までの一方的非難とは少し異った調子となっている。

「ハワイの方言、つまり英語の下位方言についてはいろいろな検討が加えられてきた。……この(独特のことばの)現象には、大変複雑な問題が含まれている。……我々が若者達にだらしのない英語 (sloppy English), 即ちピジンを使うことは、彼らの将来にとって損になるのだと説得しつづけていけば、改善の出発点となるかも知れない。……この問題は長い間我々の社会に存在していながら、改善策はほとんど成功していない。……(したがって) こうした改善案の成果も過去のものと同様悲観的な予測になってしまう。」(8/2/'64)

このように、「ピジン」を「下位方言」としてとらえる見方を示していること、そしてことばの背後にある複雑な問題について認識しはじめていくことから、今までの立場のように強力で否定していく論陣の調子が弱まってきている。そして1975年の社説では、大きく立場を変えた。

「何年もの間、ピジンは議論的になってきたが、遂に、それはしっかりとした基盤を確立したように見られる。大多数の者はこの英語のく

ずれた形式 (this corruption of English language) はハワイ文化の一部となったことを認めている。……しかし、必要な場合には、よい英語 (good English) へ切り替えもできることが望ましい。」 (9/9/75)

このように、ピジンがハワイの文化の一部となったことを認め、ピジンを用いてもよいが、よい英語と両方用いるようになってもらいたいと今までの全面否定とは立場を変えた。

1964年、1975年の社説に先立ち、Carr は、⁽⁸⁾ 現在のハワイの言語を話す層は、次の4つのグループのいずれかに入るとした。1. 標準英語を話す層。2. 本土の標準英語を話す層。3. 下位方言を話す層。4. 二言語を併用する層。4. の二言語併用層は、きちっとした状況では標準英語を、友達同士でお酒を飲んでいるような状況では下位方言と二言語を使いわけているバイリンガル (二言語併用者) の層としている。そして、現在ハワイではこうした二言語併用者が急速に増えてきているという説を発表している。

Voegelin は、⁽⁹⁾ 下位方言を使用する者は、その地域社会に自分のアイデンティティを持っているわけであり、もしある子供が友達同士の間で標準英語を用いれば、彼は“yellow haole (黄色い白人)”として仲間はずれにされてしまう。こうした言語の象徴的価値 (symbolic value) を無視してスピーチプログラムだけで標準英語の話者にするには無理がある。子供達の標準英語に対する態度は、1. 全く無視して自分達の社会・言語にのみアイデンティティをもつ。2. 自分達の社会・文化を捨てさり、標準英語に転換する。3. どちらの社会にもアイデンティティを保ち、下位方言と標準英語を状況により使いわけると。このいずれかしかないが、自分達の共同体とつながりをもち、しかも社会的地位の高い階層ともつながりをもちうる二言語併用者の道が一番望ましいという説を発表した。

こうした、Carr, Voegelin の説がハワイ社会の中で徐々に認められて

いき、新聞の論調のように、「よい英語」と「ピジン」の二言語併用者なら認めていこうというすう勢になってきたといえる。⁽¹⁰⁾

現在、ハワイではこうした二言語併用者が増えてきているわけだが、本稿では、以下において、移住者およびその末裔は、いつの時代でも二言語併用者であったこと、そして、いわゆる「ピジン」が決して一つでなかったように、時代とともに、いろいろな二言語併用者の形があったこと、さらに、現在「ピジン」が認められるようになった真の背景をさぐってみる。

3. バイリンガルには、当該二言語の言語構造をどの程度、分離し内在化しているかにより、混交形態を有する者と並置形態を有する者とにわけられる。⁽¹¹⁾ 混交形態というのは、特定言語 (lgA) の話者 (Sa) が別の特定言語 (lgB) と接触したとき、Sa が lgA の言語構造の中で lgB をとらえる異言語間同一視をおこした場合に生ずる。並置形態というのは、Sa が lgA と lgB に異言語間同一視をおこすことなく、別個の体系としてそれぞれを内在化した場合に生ずる。

二言語併用者は、それぞれの言語構造の分離化の問題とは別に、それぞれの言語の習得過程に生じてくる、その言語共同体の文化とのかかわり合いから、一文化二言語併用者と、二文化二言語併用者に分けられる。⁽¹²⁾ 二文化二言語併用者というのは、日本文化の中で日本語を、アメリカ文化の中で英語を獲得していった二言語併用者の場合、彼は、日本語を使用しているときは、例えば、義利人情といった日本文化と結びついており、英語を使用しているときは、例えば、機能性といったアメリカ文化と結びついているということである。こうした二文化二言語併用者の場合には、言語交替に伴ない内容交替を生じるという例を Ervin-Tripp は次のようにあげている。⁽¹³⁾ 日本語と英語のある一人の二文化二言語併用者は、文完成テストで、“If the work is too hard, (仕事が手に負えないならば、)” という問に対して、英語の状況では “for me, I’ll just quit.

「私ならやめてしまう」と完成させたのに対して、同じ人が、日本語の状況下では、「なんとかやりとげようとしてみる。」と全く異った文完成の仕方をするると報告し、その意味で二文化二言語併用者は二重人格 (double personality) を有しているときえ述べている。

一方、一文化二言語併用者の場合、例えば、日本の学校教育の中で英語を獲得していった二言語併用者は、英語を習得していく場合も日本語の使われる社会の文化の中でなされていくわけであり、従って、言語交替に伴ない大幅な内容交替がおこることはない。

言語構造の分離化と言語習得の周辺にある文化の分離化の問題をハワイ旧本人・日系人にあてはめて考察してみよう。

まず、No money nara no can yo, というようなプレピジン¹³は、日本語の言語構造から英語をとらえたものであり、混交形態の代表である。プレピジンを用いた層は、日本語を第一言語として生活の大部分を暮らしたわけであるが、異言語からの影響は彼らの日本語にも入ってくるようになった。19世紀後半にハワイの甘蔗耕地で自然発生的に生れ、広く日本人の間で歌われるようになった唯一の民謡、ホレホレ節から歌詩をひろってみよう。⁽¹⁴⁾

〜ルナがフウフウしようとヨウ 二人はままよ

晴れて添います ホノルルで

(ルナは監督、フウフウは怒る。監督がいかに怒ろうとホノルルまで何とか逃げれば、二人は天下晴れて夫婦になれるという意味)

〜ハナワイすましてヨウ キャンプに戻りゃ

にくやマウカに^{めおと}夫婦星

(ハナワイは、黍に水^{みづ}をひくこと、きびしいこの仕事を終えて帰ると山の上に星が出ている。その星までが夫婦星なのに、この自分には疲れた心身をやさしくいたわってくれる妻もない。耕地生活のわびしさ、痛々しさである)

「明日はサンデーじゃヨウ 遊びにおいて

カネはハナワイ わしゝ家に

(カネは主人である。主人は水引きに一日働いているから、情夫に遊びにこいと誘いをかける浮気女房の姿だ。)

このように、彼らの日本語は、ハワイ語、英語の影響を受けるようになっている。しかし、これは本質的にプレピジンとは異なる。ホレホレ節にあらわれるハワイ語、英語は全て名詞または名詞化されたものばかりであり、日本語へ与えた影響は語彙の面だけで構造そのものには何ら影響を与えなかったのに対して、プレピジンは名詞のみならず助動詞 (can, no)、をはじめとする機能語まで流入してきており、これは言語の構造の混交を意味するからである。したがって、プレピジンを話す層は、日本語と、英語・日本語の混交形態を話す二言語併用者であるといえる。

しかし、プレピジンの用いられる状況は限られており、当然、それは曖昧性の多い、その意味では、新聞等で非難された不完全な言語であり、生活の大部分は、第一言語である日本語ですませていく状況であった。従って彼らが、どちらの形式を用いようと、あくまでも日本の文化にアイデンティティをもった一文化二言語併用者であることがわかる。

My husband house kaukau no good. というピジン英語は、異なった母語を基盤とするいくつかのプレピジンをお互に用い合うことによって、それぞれの母語の枠組からはほとんど離れえたものであるが、発音・語法の一部等において、それぞれの母語の影響が多少でるのは止むを得ないことである。⁽¹⁵⁾ 曖昧性の多いピジン英語は、その意味で、プレピジン同様不完全な言語であり、彼らは第一言語の日本語を主として生活を送っていた。したがって、ピジン英語を用いるものは、並置形態に近い二言語併用者であり、そして、日本語を話す社会の文化にアイデンティティを見いだす一文化二言語併用者であるといえる。

I no go stay eat のようなクリオール英語は、友達同士の間で使われ

ていった二世の第一言語であり、その意味で、プレピジン、ピジン英語とは異なった、完全な言語形式である。ハワイの日系人は、他の人種とは異なり、人口構成比率が圧倒的に高かったこともあって（1920年の統計では、全人口の40%以上も占めていた。）戦前には日本語学校が盛んになり、ほとんどの日系二世は、英語での公教育を受けたあと日本語学校へ行き日本語や日本の歴史等を学んでいた。日本語が第一言語の両親の中で育ち、学校へ行くようになってからも、このように日本語を学んでいったわけであるから、ほとんどの二世は、クリオール英語とともに日本語も話せたわけである。但し、その二言語は、完全な並置形態を保っていたわけではない。1940年、布哇（ハワイ）中央学院発行の文集『蒼穹』にある「誤り易い言葉使い」よりひろってみよう。

×まちがった言い方

中村君がおちました。
 先生は眼鏡をおいています。
 友達を会う。
 道を迷う。
 犬が二つありました。
 私は猫が好きです。
 あの人は白い髪を持っています。

○正しい言い方

中村君がころびました。
 先生は眼鏡をかけています。
 友達に会う。
 道に迷う。
 犬が二匹みました。
 私は猫が好きです。
 あの人の髪は白いです。

このように、日本語のことはば使いに、明らかに英語の影響からくる間違い易さが生じてはいるが、それは全体から見れば、ほんの一部である。従って、二世の多くは、クリオール英語と日本語の並置形態に近いものももっていたといえよう。ただし、二世の中で、政治家、医者、弁護士といった社会の上層に入っていたものは、クリオール英語、日本語の他に標準英語もつかえる三言語併用者であったといえるが、ここでは、二言語併用

者のみに議論をしぼる。

クリオール英語は、子供達が地域社会ではピジン英語を聞き、学校教育の中などの標準英語の影響を強く受けながら発達させてきた、英語とはかなり異った文法形式を持った言語である。彼らが、学校では標準英語を習っていないながら、独自の形式を発達させ持続していったのは、Voegelin が述べたように、彼らの中で標準英語を話す者は、**yellow haole** (黄色い白人)として仲間はずれされるような、ハオレとは別の自分達のアイデンティティを求めていたからに他ならない。しかし、彼らは、両親のように、日本の文化の中にだけ、自分達のアイデンティティを求めていたわけでもない。彼らの第一言語はあくまでもクリオール英語なのであり、第二言語が日本語なのである。そこから、先にみたように、彼らの日本語には混交形態の入る部分も多少みられるが、その逆、つまり、彼らのクリオール英語に日本語の混交形態がでてくることはないということになるのである。⁽¹⁶⁾従って、彼らの中核を占めるアイデンティティは、両親のものとも異なる、標準英語を話す層のそれとも異なる、彼ら自身のものである。

しかし、両親をはじめとする一世、日本語学校等での日本語の世界には、日本文化が強く残り、その中で日本語を用いてきたわけであるから、彼らが日本語を用いる時には、日本文化が強く反映されていた。『蒼穹』より日系二世の作文を紹介しよう。

日 本 語

僕は日本語は下手でありながらも、どれだけ大切であるかは知つてゐます。僕の家ではお父さんもお母さんも、英語はほんの少ししか分らないので、べらべら英語でしゃべつても駄目ですから、どうしても日本語で話さなければなりません。言葉や字を間違つた時は人に變に思はれますが、お父さんやお母さんには僕達の言葉が馴れてゐるので何とも思はれません。併しいつも『立派な日本語をつかはないと御客

様や日本から来た御友達に笑はれるよ。』とよく言はれてゐます。

布哇にゐる 僕達第二世が 將來世の中に出て 日本語がよく話せない
と、どれだけ損であるか分かりません。今働いてゐる人で、小さい時日
本語學校に通はなかつた人や、行くことが出来なかつた人々は今にな
つて後悔し、夜學にまで通つて日本語を習つてゐる人も少くはありま
せん。それらの事をよく考へて見ると、僕達が將來日本人の所に仕事
をした時、僕達は日本語を知らず、主人は英語の分らない人であつた
時、どれだけ恥しいことか分かりません。それだけではなく出世するこ
とも出来ません。

今手紙を日本に出す時は、お父さんやお母さんに手傳つて頂いてみ
ますから樂に手紙を書いてゐますが、それも長くつゞくではありません。
何時かは僕達は一人で書かなければならなくなるのです。此等
の事をよく考へて見ると、日本語がいかに大切であるかと言ふ事はは
つきりと心に浮かんできます。

兄 へ

お兄様

永らく御無沙汰に打過ぎ誠にすみませんでした。お兄様にはますます
御元氣で御國の爲に御働きになつていらつしやる事とお察しいたし
ます。私も相變らず達者で、毎日學校に通つて居ますから御安心下さ
いませ。

日本では冬も過ぎ、花時の春が近づいて来た事でせう。常夏の布哇
は年中暖かで日本の様に四季は御座いませぬので、何時何處へ行つて
も美しい花や緑の葉をした木々を見受ける事が出来ます。けれども日
本の櫻のやうな美しい花はありません。私はもう一度日本へ行つて、
あの美しい櫻を見たいと思つて居ます。

お兄様には日支事變が始まつて以來、戰線において御活躍なさつて

おられると母から聞いた時にはびつくりいたしました。私が日本に居ました頃はよく妹の様に可愛がつて下さいましたお兄様が、今は帝國の軍人として戦線にたつて居られるかと思ふと、何だか嬉しいやうな、誇らしいやうな氣がいたします。どうぞますます立派なお手柄をおたて下さいますやう。そして私もお兄様に負けぬやう一心に勉強いたす考へです。

お兄様、私はもう女學校三年生になりました。來年は女學校を卒業いたします。さうすれば日本に留學させてやると父母は申してゐます。私は其の日を楽しみに今から指折り數へて待つてゐます。

ではくれぐれもお體を大事に。立派なお働きをお祈りいたしてゐます。

さようなら。

二世達は、このように第一言語としてはクリオール英語を用い彼ら独自の文化にアイデンティティを求めてはいても、日本語を用いる時には日本の文化に密接なつながりを持つ二文化二言語併用であったのである。

彼らのもつ二つの文化が葛藤するようになったのは、日本が敵国となった時である。しかし、彼らの第一言語は、白人の標準英語とは異なるにしても、クリオール英語であったわけであり、自ら進んで志願し、ヨーロッパ戦線で活躍した 442 部隊の話は余りに有名である。

所で、クリオール英語という独自の形式を發達させた、ハワイの日系二世兵士と、人口構成の上で少数民族であったため独自の形式を發達させることのなかった、カルフォルニアを中心とする本土の日系二世兵士とは、必ずしも、日本人を両親とするという共通項でもって連帯していったわけではなかった。ハワイの日系兵士は本土の日系兵士を **budda head** (ぶた頭) と呼び、**yellow haole** のようにみなしていた。一方、本土の日系兵士はハワイの日系兵士を **kotonk** といって、頭をなぐればやしの実をな

ぐった時のようにコトンと音のする頭の空っぱ野郎と馬鹿にしていた。クリオール英語を発達させたハワイ二世とそうではなかった本土の二世の異和感を如実に示している。(17)

He is da kine about her. というような下位方言は、語彙等を除いては、クリオール英語とは比べものにならない程、標準英語に近づいた形式となった。そこから、これは、標準英語を用いる層でも、うちとけた状況では用いられるようになってきた。それで、下位方言と呼ばれるわけであり、英語の中の一変種にすぎなくなった。Carr, Voegelin は標準英語と下位方言を使いわけれるものを、二言語併用者と呼んでいるが、厳密には二方言併用者 (bidialectal) と呼ぶべきであり、丁度、我々が敬語と日常語を使いわけているのと同質の問題となってくる。この二方言併用者が、混交形態、並置形態のいずれかであるかの問題は、これまでのような異言語間の問題ではなく、同一言語内の異変種間の問題になり、次元が異なる議論となるのでここでは割愛する。

ハワイの二方言併用者は、当然英語の中の文化に自分達のアイデンティティを求めているのであるから、あえてなずけるとすれば、一文化二方言併用者といえる。しかし、一つの文化の中には社会状況により、様々な価値感が支配しているものである。(18) 酒場で楽しく飲み合う友人同士には、親密感という価値感が、その同じ友人同士に会社の重要会議の席上では、正式な場にある価値感が支配している。伝達活動はこうした様々な価値感が支配する中で、その価値感にふさわしい変種を使いわけていくことによりなされる。これをハワイの二方言併用者に当てはめてみると、彼らは正式な場では標準英語を、親密感のある場では下位方言を用いているが、これは、一つの文化の中で、異なる価値感が支配するそれぞれの状況下で二変種を使いわけているのだということがわかる。

4. プレピジン、ピジン英語を用いる者は一文化であった。二方言併用者

は勿論一文化である。こうしてみると、二文化を内在化していたのはクリオール英語を用いる二世達だけであったことがわかる。さらに、プレビジンは混交形態。ピジンは不完全な言語。下位方言は英語の変種。こうしてみると、真に二言語を並置していたのもクリオール英語を用いた二世達だけであることがわかる。

Carr は、現在二言語併用者がふえてきていると述べているが、真の二言語併用者は、二世が少なくなっていくにつれ、徐々に減ってきているのである。そして、これは、見方を変えれば、三世以下の世代が、うまく一つの文化の中に吸収されていったことを示している。

ハワイにおいては、一世、二世が少なくなっていくにつれ、外見的には色々の人種がみられるにしても、一つの文化に吸収され、異言語に附随する異文化との葛藤も少なくなるという状況がでてきたので、新聞の社説でも、「ピジン」を許容する論調が生まれてきたのである。

注

- (1) 本稿は、拙稿「ハワイの英語とアメリカナイゼーション」『表現学論叢』S. 55年、において記した基本的考え方を、バイリンガリズムの立場から見なおし、新たな資料をつけ加え加筆修正したものである。
- (2) 出典については、拙稿 (S. 55年) 参照。
- (3) ハワイ語と英語とはかなり言語構造が異なる。特に音韻体系はハワイ語の場合簡明なので、英語名、Bruce, Fred, Frances は、それぞれ、Puluke, Peleke, Palakika と発音されていた。Elizabeth Carr, *Da Kine Talk*, The University Press of Hawaii, 1972.
- (4) 統計上の数字の詳細は、拙稿 (S. 55年) 参照。
- (5) プレビジン等、以下の4つの名称については、拙稿 (S. 55年) 参照。
- (6) 方言とする立場は、John Reinecke and Akiko Tokimasa "The English Dialect of Hawaii" *American Speech* 9, 1934, Carl Voegelin and Florence Voegelin "Hawaiian Pidgin and Mother Tongue" *Anthropological Linguistics* 6:7, 1964. クリオールとする立場は、Stanley Tsuzaki "Coexistence Systems in Language Variation" *Working*

- Papers in Linguistics* 2:8, Dept. of Linguistics, University of Hawaii, 1970, Derek Bickerton "Creolization, Linguistic Universals, Natural Semantax and the Brain" *Working Papers in Linguistics* 6:3, Dept. of Linguistics, University of Hawaii, 1974.
- (7) Elizabeth Carr "A Recent Chapter in the Story of the English Language in Hawaii" *Social Process in Hawaii Vol. 24*, 1960.
- (8) Carr (1960)
- (9) Voegelin (1964)
- (10) バイリンガルを認めていこうという動きはハワイだけでなく、アメリカ合衆国全体のメルティングポットからモザイククリサエティーへの大きな発想の転換とも関係がある。詳しくは、拙稿「二言語併用者の諸問題一言語心理学の立場より(その1)」『愛知淑徳短期大学紀要第16号』S. 52年。
- (11) 詳しくは、拙稿「二言語併用者と干渉の三類型」『表現研究第27号』S. 53年『英語学論説資料第12号』
- (12) 詳しくは、拙稿(S. 52年)
- (13) Susan Ervin-Tripp "Identification and Bilingualism" *Language Acquisition and Communicative Choice* Stanford University Press 1973.
- (14) 足立聿宏『ハワイ日系人史』柳原書店, 1977.
- (15) Carr (1972)
- (16) クリオール英語に日本語の影響は多少みられるが、それは、プレビジン・ピシン英語という流れの中で受けつがれてきたもので、二世の日本語からの影響ではない。
- (17) budda head, kotonk について詳しくは、Patoricia Morimoto "The Hawaiian Dialect of English" MA Thesis in Speech, University of Hawaii.
- (18) 詳しくは、拙稿「二言語併用者と価値感」『表現研究第29号』S. 54年、『英語学論説資料第13号』